

IV-6 中国・四国

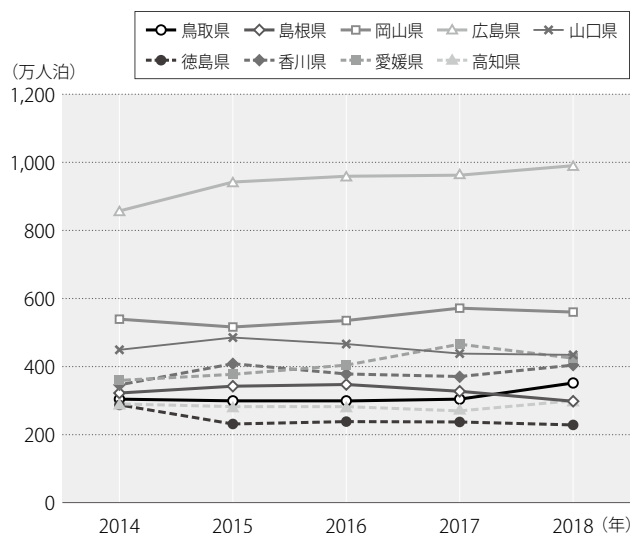
平成30年7月豪雨の影響あるも年間では延べ宿泊者数は増加
需要回復のためのプロモーションに注力の動き
観光施設の新規オープンやリニューアルも活発化

(1) 都道府県レベルの旅行者動向

観光庁「宿泊旅行統計調査」によると、2018年1～12月の中国・四国全体の延べ宿泊者数は3,994万人泊となり、前年比で1.0%の増加であった。

県別にみると、延べ宿泊者数が増加した県は、鳥取県（前年比19.1%増）、高知県（同11.1%増）、香川県（同7.7%増）、広島県（同2.8%増）の4県であった。一方、減少した県は、愛媛県（前年比9.6%減）、島根県（同6.6%減）、岡山県（同3.6%減）、徳島県（同3.2%減）、山口県（同2.0%減）であった（図IV-6-1）。

図IV-6-1 延べ宿泊者数の推移(中国・四国)



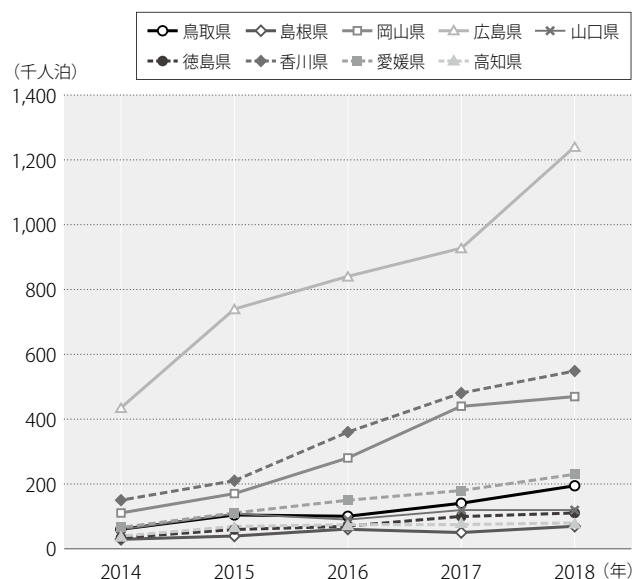
県	2014	2015	2016	2017	2018
鳥取県	304	299	299	299	356
島根県	322	342	347	319	298
岡山県	539	516	535	583	561
広島県	857	942	959	963	990
山口県	449	485	466	444	435
徳島県	287	231	238	230	222
香川県	346	408	378	376	405
愛媛県	359	377	404	470	425
高知県	290	282	282	271	301

単位：万人泊
資料：観光庁「平成30年宿泊旅行統計調査」をもとに（公財）日本交通公社作成

2018年1～12月の中国・四国全体の外国人延べ宿泊者数は307万人泊となり、前年比で22.1%の増加と高い伸び率を示した。

県別にみても、中国・四国地方の全ての県において前年比プラスとなり、伸び率の高い順に、島根県（前年比52.0%増）、鳥取県（同38.6%増）、広島県（同33.3%増）、愛媛県（同28.5%増）、香川県（同13.2%増）、徳島県（同13.1%増）、岡山県（同6.9%増）、高知県（同5.0%増）、山口県（同4.5%増）であった（図IV-6-2）。

図IV-6-2 外国人延べ宿泊者数の推移(中国・四国)

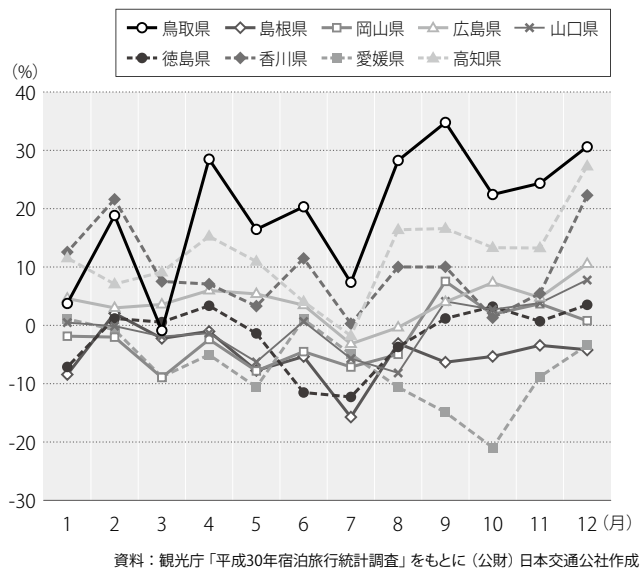


県	2014	2015	2016	2017	2018
鳥取県	59	103	100	141	195
島根県	28	43	58	48	73
岡山県	111	171	282	439	469
広島県	435	741	840	928	1,237
山口県	57	109	93	117	123
徳島県	36	58	69	103	116
香川県	143	210	358	482	546
愛媛県	64	107	147	179	230
高知県	39	66	75	75	79

単位：千人泊
資料：観光庁「平成30年宿泊旅行統計調査」をもとに（公財）日本交通公社作成

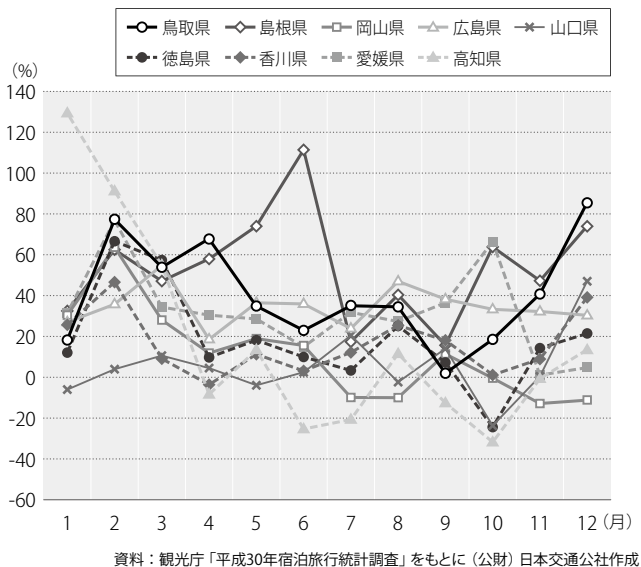
県別の動向を月単位で見ると、平成30年7月豪雨が発生した2018年7月の延べ宿泊者数は、鳥取県で前年比6.3%のプラスになったものの、それ以外の各県では軒並み前年比マイナスとなった。特に、島根県で前年比17.4%減、徳島県で同13.9%減、岡山県で同8.6%減、愛媛県で同6.4%減となるなど落ち込みが大きかった。その後、年の後半にかけても、愛媛県や島根県では前年比マイナスとなる月が続いた（図IV-6-3）。

図IV-6-3 月別延べ宿泊者数の前年比(中国・四国)



一方、2018年7月の外国人延べ宿泊者数については、岡山県で前年比10.3%減、高知県で同21.0%減となっているほかは、前年比プラスとなった（図IV-6-4）。

図IV-6-4 月別外国人延べ宿泊者数の前年比(中国・四国)



(2) 観光地の主要な動き

① 地方・都道府県レベル

●平成30年7月豪雨の影響と対応

2018年7月上旬、台風第7号から変わった温帯低気圧が、本州付近に停滞していた梅雨前線と一体化し、暖かく湿った空気が継続して流れ込んだ影響で、前線の活動が非常に活発となった。このことで西日本を中心に広い範囲で記録的な大雨となり、各地で河川の氾濫や土砂災害が相次ぎ、死者・行方不明者が多数となる甚大な被害となった。また、電気、水道などのライフラインの被害のほか、道路、鉄道などの交通インフラにも甚大な被害が発生した。

中国・四国地方における観光面での直接的な被害は、一部で道路の通行止めや電車の運休が発生したものの、厳島神社、原爆ドームといった世界遺産や、直島、道後温泉、栗林公園、鳴門渦潮などエリア内の主な観光地・観光資源では大きな影響はなく、交通インフラも復旧作業が進められた。

一方、前述したように、7月以降に需要の落ち込みが発生したが、これに対して、中国・四国地方の9県（広島県、鳥取県、島根県、岡山県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県）及び3つのDMO（せとうち観光推進機構、山陰インバウンド機構、四国ツーリズム創造機構）は、2018年12月より「元気です！中・四国」をキャッチフレーズに「中国・四国9県連携復興プロモーション」を実施した。

このプロモーションでは、「鍋」や「温泉」など冬の観光をテーマに、中国・四国の様々なベストナインを発表する「#中国・四国 冬のベストナイン」や、中国・四国地方の観光相談の窓口として2019年1月末までの期間限定で「ひろしまブランドショップTAU」内に中国・四国9県観光ツアーデスクを開設するなどの取り組みが行われた。

●せとうちDMOがマーケティング・エージェンシーを強化

せとうちDMO（（一社）せとうち観光推進機構及び（株）瀬戸内ブランドコーポレーション）では、欧米向けインバウンドプロモーションの強化のため、海外の政府観光局やDMOをクライアントに持つ旅行業界に精通したマーケティング会社（エージェンシー）をフランスに設置した。同様の取り組みはすでにイギリス、ドイツ、アメリカでも展開しており、フランスへの設置により4市場を横断したマーケティング活動を開始する。

上記以外にも、同DMOではマーケティングと商品開発の両面から活発な活動を行っている。マーケティング面では、2017年12月に立ち上げたウェブサイト「SETOUCHI TRIP」を活用し、海外に向けた動画コンテンツの配信や、WEB、SNSへの広告・記事を掲載し、その閲覧結果を分析・検証することで成果の「見える化」を香川県などと連携しながら推進した。また、商品開発の面では、「プロダクト開発戦略策定事業」を実施し、滞在コンテンツの開発状況について現状を調査するとともに、地域として取り組むべき事業戦略案の検討と、地域の観光資源の商品化について具体的な手法を確立した。

●サイクリングしまなみ2018開催

2018年10月に、瀬戸内しまなみ海道及びその周辺地域を会場として、国際サイクリング大会「サイクリングしまなみ2018」が開催された。この大会は、タイムを競うレースではなく、世界有数のサイクリングコースとなっているしまなみ海道を舞台にサイクリングを楽しむことを主眼に置くイベントであり、高速道路を規制して行われる日本唯一のサイクリング大会となっている。大会では、瀬戸内しまなみ海道の魅力を堪能できる7つのコース設定がなされ、国内外から7,000人超のサイクリストが参加した。

●星空を観光資源とする「星取県」の取り組み進む

鳥取県は大都市地域に比べて清浄な大気環境を有し、また人工光が少ない暗い夜空であることから、すっきりと晴れた

日の夜には、県内随所で天の川を眺めることができる。県内では、この星空を活かした取り組みが行われている。

鳥取県では、2018年4月に鳥取市佐治町、同年6月に日南町を星空保全地域に指定し、星空保全照明基準を設定するとともに、星空保全地域振興補助金によって、保全地域で実施される地域振興事業を支援した。

②広域・市町村レベル

●水木しげるロードのリニューアル

JR境港駅から続く約800mの通りに177体の妖怪ブロンズ像が立ち並ぶ水木しげるロードは、1993年7月に誕生してから25周年となる2018年7月にリニューアルした。懐かしい昭和レトロな街並みはそのままに、歩道を広げ休憩所を増やすとともに、妖怪ブロンズ像をゾーン分けし、すべて再配置した。

夜には、新たに全線に妖怪の影絵の照明が投射されるとともに、ブロンズ像のライトアップが施され、来訪者がいつでも快適に楽しめるようになっている。同年12月には、来訪者数が5年ぶりに年間270万人を突破した。

●鳥取砂丘にビジターセンターオープン

2018年10月、鳥取砂丘の入り口近くに鳥取砂丘ビジターセンターがオープンした。

施設内には、自然の造形としての砂丘の美しさや生きものの生命力を伝えるゾーン、映像で砂丘の魅力を臨場感豊かに伝えていくコーナー、鳥取砂丘のなりたちや特徴、植物や動物、砂丘と人々の営みを学べるゾーンなどがあり、これらを巡ることで、鳥取砂丘への関心と理解を深め、砂丘を歩くフィールドツアーへの期待感を高めるように構成されている。

●足立美術館の外国人観光客からの人気続く

日本庭園と横山大観コレクションで知られる、安来市の足立美術館の2018年度の訪日外国人客の入館者数は7年連続で過去最多を更新した。また、国内客を含む総入館者数も過去2番目の多さだった。

また、アメリカの日本庭園専門誌『The Journal of Japanese Gardening』が、全国の日本庭園900か所以上を対象に実施した「2018年日本庭園ランキング」が発表され、同館の庭園が16年連続で日本一に選ばれた。

●広島平和記念資料館のリニューアルオープン

広島市の広島平和記念資料館では、原爆の非人道性や原爆被害の凄惨さを伝えていくため、2011年度から本館と東館を合わせた常設展示の全面的な更新を行っていたが、本館の展示整備が完了し、2019年4月にリニューアルオープンした。これにより常設展示の整備は完了し、2017年4月に先行してリニューアルオープンしていた東館と合わせ、全ての常設展示を観覧できるようになった。

●多目的空間「LOG」オープン

ディスカバーリンクせとうちは、インドの建築集団であるスタジオ・ムンバイ・アーキテクトと共同で、尾道市の千光寺につながる坂道の途中のアpartメントを、ダイニングやカフェ、バー、ショップ、ギャラリー、ガーデンなどを備えた宿泊施設「LOG (ロ

グ) - Lantern Onomichi Garden-」として再整備し、2018年12月にオープンした。

施設は、手漉きの和紙などの自然の素材を取り入れ、尾道の歴史や文化、自然・景観と調和のとれた空間となっている。

●尾道駅の駅舎の建て替え完了

せとうちエリアを周遊する観光客の新たな拠点として、建て替え工事が行われていた尾道駅舎が、2019年3月に完成した。尾道の土産を取り扱うコンビニエンスストアや、サイクリストや海外からの旅行者をターゲットにしたホステルタイプの宿泊施設、レンタサイクル&カフェなどが出店している。

●山口ゆめ花博開催

2018年の9月から11月の52日間にわたり、明治150年プロジェクト「やまぐち未来維新」の中核イベントとして、「山口ゆめ花博」が山口市内の山口きらら博記念公園を会場として開催された。

様々な年代の来場者が山口の魅力体験できるよう、会期中には2,000を超えるイベントが実施され、延べ136万人の来場者があった。

●道後REBORNプロジェクトがスタート

松山市の道後温泉では、2019年1月より重要文化財である道後温泉本館を、公衆浴場として営業しながら保存修理を行う工事に着手した。合わせて故手塚治虫氏のライフワークである「火の鳥」とコラボレーションした「道後REBORNプロジェクト」をスタートさせ、オリジナルアニメーションの制作や、同年4月からはアニメと連動したプロジェクションマッピング、同年7月からは、工事仮設物に「火の鳥」のラッピングアートを行うなどの取り組みを行っている。

●新足摺海洋館の愛称決定

土佐清水市の高知県立足摺海洋館は「土佐の海と黒潮の魚たち」をテーマとして、黒潮が迫る沿岸の魚類や、磯の潮だまりに住む無脊椎動物などの展示を行っており、開館以来300万人を超える来場者があるが、さらに魅力あふれる施設になるよう2020年夏の開館を目指し建て替えに向けた準備を進めている。

高知県では、親しみを持って利用してもらうため愛称を募集し、2019年1月に愛称を「SATOUMI」に決定した。

●むろと廃校水族館オープン

2018年4月に、廃校になった小学校を改装した「むろと廃校水族館」が室戸市内にオープンした。

屋外の25メートルプールを水槽に使った展示のほか、地元の漁師らが提供した魚やカメラなど約1,000匹を観察できる。同年8月には、2018年度の目標の来館者数4万人に達した。

●坂本龍馬記念館のリニューアルオープン

高知市の高知県立坂本龍馬記念館は、約1年間の休館を経て2018年4月にリニューアルオープンした。同館は、2017年から2か年にわたり開催された「志国高知幕末維新博」第2幕のメイン会場で行ったリニューアルオープン後の来館者数は順調に推移し、2019年3月には、2018年度の目標の20万人に達した。

(菅野正洋)